

# 高山小唄

新編 夕陽作 節  
花柳 舞之 節 曲 集  
山下 25 節 舞 節

上品にあつくり

1 1 2 1 2 3 4 5 5 4 3 2 0 2 2  
0 4 5 6 7 8 2 1 2 3 2 2 1 1 1 2 0 1  
2 2 0 1 2 2 1 2 5 4 3 2 1 6 7 6 1 2 1  
エ ノ ヤ ヤ ミ ナ - ハル - バ - ル - コ - エ -  
2 0 1 5 6 5 4 3 2 2 2 0 1 2 1  
2 4 5 6 6 6 5 4 3 2 3 3 2 1 6 1 2 1 1  
ミ ヤ コ ノ - タ カ - ヤ - マ - ヘ ア ヤ  
6 1 6 1 2 3 3 2 3 3 2 3 3 2 3 3 2 3 3  
タ カ ヤ マ ヘ (ア レ コ - ワ イ ソ ナ ラ  
2 3 3 2 3 3 2 6 1 2 1 6 5 6  
ア バ エ ナ - マ タ - ) ア ハ マ イ カ イ ナ

注意 ( ) の内、譜ハ三絃用從ヲ( ) の内、歌詞ハ朗吟調(宣叙調)ニテ述ベル。

- 五、宮の八兵衛は酒すきで 酒を三杯嬬かへた
- 六、嬬をかへたはよけれども 酔がさめたらしくやしがる。
- 七、飛驒の高山高いが名所 山も高いが名も高い
- 八、加賀で白山信州で御嶽 飛驒じや乗鞍槍が岳。
- 九、長い鳶口伊達には持たぬ 五寸丸太で瀬を下る
- 二、川の七瀬のござの上を 踊り越すとや若鮎が。
- 二、上野平で高山見れば 浅黄のれんがそよ〜と
- 三、浅黄のれんに何屋と書いて 二人暮すが何時じややら。

註  
一、高山盆踊は九月十六日より晴天七夜、縣社八幡神社の大境内で行はれるが、千姿萬態の變裝で何百人の男女が午前二時頃迄踊り続ける。  
二、音頭取の居る高棧敷には、三味線(三張)大太鼓(一)が備へられ歌に合はせる。



高山小唄

- 一、八重の山路はるく越えて  
山の都の高山へ(アリヤ)高山へ(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 二、飛驒の高山お山の都  
一夜しつぱり寝にござれ(アリヤ)寝に御座れ(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 三、花の高山自慢の名所  
春は城山さくら山(アリヤ)櫻山(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 四、ひと夜泊りによばれて御座れ  
山王祭の屋臺見に(アリヤ)屋臺見に(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 五、河岸の柳がもつれてどけて  
戀の中ばし夕涼み(アリヤ)夕涼み(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 六、嶽は初雪花嫁姿  
里は紅葉の色重ね(アリヤ)色重ね(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 七、雪の夜道にや忍びの幌で  
御座れ箱櫃、猫炬燵(アリヤ)猫炬燵(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)

Handwritten notes and a drawing of a sun-like symbol with rays.

- 八、雪か時雨か浮世をよそに  
離座敷の炬燵酒(アリヤ)炬燵酒(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 九、深山そだちのおなごやけれど  
あの娘ア山百合、山櫻(アリヤ)山櫻(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 一〇、二番躑躅はいま花盛り  
娘ざかりはひと盛り(アリヤ)一盛り(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 一一、花の盛りは昔の夢よ  
今ちや落ち鮎おざれ鱈(アリヤ)おざれます(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 一二、東山からお月様がのぞく  
可愛おなごの夕化粧(アリヤ)夕化粧(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 一三、親さだましちや勿体ないが  
お顔みたさの別院参り(アリヤ)別院まいり(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 一四、螢狩りとは世間の手前  
灘の天神湯は出遇場所(アリヤ)出遇場所(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)
- 一五、盆にや踊らまいか八幡様で  
おまへ義經わしや静か(アリヤ)妾しや静か(アレ、コウライ、ソナナラ、アバエナ、マタアロマイカイナ)



盆踊音頭

竹に雀は品よく止まる、止めて止まらぬ色の道  
宮の祭は大八月の、何時も變らぬ二十五日  
宮の祭の過ぎたる夜は、御座れ久々野の橋場まで  
坂田藤十郎や島崎や、さては山下又四郎や  
踊るたわけに見るたわけ、音頭とる奴尙たわけ  
平湯峠が海ならよかろ、乗せて渡そよわが殿を  
心細いよ中山七里、川の鳴る瀬や鹿の聲  
高い山から谷底見れば瓜や茄子びの花盛り  
ほれちやつまらぬ他國の人に、末は鳥の泣別れ  
淺間山から鳴いてくる鳥、錢も持たづに買ふくくと  
竹になりたや七くの竹に、もとは尺八中は笛  
三味を横だき淺間を眺め、つとめつらいと目に涙だ  
聲は細聲お庭は廣や、とどきますまい隅々へ  
一つや二つや三つや四つ、十にも足らぬ幼児が

十にも足らぬ幼児が、手足そろへてよく踊る  
お染さまへなこりやお染、そなた腹帯何事ぞや  
ごらもごらやが大酒のみの、其の日暮しの良人がよい  
小鳥白川六厩のお寺、こけら葺とは知らなんだ  
咲いた櫻になせ駒つなぐ、駒が勇めば花が散る  
來いと言はれて行く其の夜は、足のかるさよ嬉しさよ  
會て嬉しや別れのつらさ、會ふて別れがなけりやよい  
朝の別れに袖引きとめて、又もお出でと目に涙  
島田かはいや丸鬚にくや、中でいちよ鬚尙かわい  
益田よい所奥飛驒よりも、竹の林がそよくと  
嬬をもらふなら大きい嬬もらへ、二百十日の風の垣  
土用の中ばに秋風吹けば、殿の病氣も癒ろもの  
酒はよいもの氣を勇ませて、顔へ五色のいろを出す  
酒のきげんで替へたはよいが、酔がさめたらくやしかり  
さしたさかすき中見てあがれ、中は鶴龜五葉の松  
郡上の八幡よい茶の出所、娘やりたや茶を摘みに



花か蝶々か蝶々か花か、来てはちよろ／＼迷はせる  
 咲けよ／＼と咲かせておいて、咲けばゆうご(夕後)のもだ(むだ)花よ  
 お酒呑む人、蕾の花よ、今日も咲け／＼明日も咲け  
 思ひ込んだにそはしておくれ、神も佛も親様も  
 あなた百までわしや九十九迄、共に白髪が生えるまで  
 かま／＼と言ふてさへくれりや、何で繼子が悪かりよか  
 わたしや道樂意見で止まぬ、時と時節が来りや止まる  
 お風召すなの其の一言は、どうも他人と思はれぬ  
 ほろり／＼とよく立つ聲が、何におそれ立たぬやら  
 思ひ出いては寫眞を眺め、何故に寫眞は物言はぬ  
 鳥も通はぬ嶽山なれど、住めば都に思はれる  
 わしが死んだらしきみの花を、立て、おくれよ寺々へ  
 盆にや御座れよ正月ア来でも、死んだしやうらい盆に来る  
 盆にや御座らぬ祭にや見えぬ、ござれ九月の回壇に  
 もうし兄様矢立ちが落ちる、矢立ち落ちねど顔みたい  
 水は下へと流れるけれど、水に言傳してやれず

水に言傳木の葉の手紙、何んばやつても届きやせぬ  
 今宵一夜はお泊りなさりよ、西の黒雲雨となる  
 月夜なら来い闇ならくるな、闇にうたれた人もある  
 いやで幸好かれちや困る、お氣の毒じやが外にある  
 かわい我が子も嫁とりくれやにくや、嫁はさき生のかたきかや  
 立てば芍薬坐れば牡丹、歩む姿は百合の花  
 親の意見と茄子の花は、千に一つのむだはない  
 わたしや蠟燭心から燃える、あなた附木で口の先  
 おらが良夫のやれ番じややら、城の太鼓の音のよさ  
 思ひ切れとは皆様おしやる、思案せよとは親ばかり  
 宮で角助平湯で與茂さ、岩瀬佐助の眞似ならぬ  
 目出度／＼の若松様よ、枝も榮ゆる葉もしげる  
 ほと／＼ぎすたしか鳴いたと雨戸を明けて、見れば今宵の月ばかり  
 揃ふた／＼よ踊り子が揃ふた、稻の出穂より尙そろた  
 吉田八重菊八重ばたん、浮名ながしたうす波は  
 寺の御庭に箒はいらぬ、踊る若い衆の裾ではく



神や佛の眞似にやなるけれど、茂住宗貞のまねやならぬ  
 美濃の金山公事<sup>ジ</sup>して負けた、河をとられた下原へ  
 新宮まつりは九日十日、宮のまつりは二十五日  
 音頭とりめがとりくたびれて、さいた刀を杖につく  
 雨が降りぬ七十五日、小坂傳馬の止るほど  
 心やすく安川の、向ふに見ゆるは鍛冶屋ばし  
 踊りおどつて嫁の口なけりや、一生後家でもかまやせぬ  
 さてもおそろしや鉄砲町、耳に手をあて走りゆく  
 心淋しや堀の側、通りぬけたるうれしさよ  
 でかい男は美濃の國、綿屋問屋の一手代  
 かあい殿ごは大富山で、槌やたがねで苦勞する  
 平湯くどやしみやるけれど、平湯やゆも出る金も出る  
 酒は酒やによい茶は茶屋に、女郎は茂住の銀山に  
 益田川でも白木を流す、わたしやぬし故名を流す  
 詣りたいよな中野の御坊へ、拜みたいよな御繪様を  
 こゝが正しく嘉念坊様の、お墓所か有がたや

八賀上野で高山見れば、淺黄のれんがさよくと  
 益田通れば麥つけくと、つかで食はりよか角麥を  
 かさはかいてもしめごは飲むな、平湯、蒲田に湯がござる  
 一夜おいでと言ひたいけれど、まんだか、まのそばに寝る  
 わしはそなたに一心かけた、にしんかけたら猫の飯

高山町消防歌

(一)

- 一、驚破鐘が鳴る風疾し  
 伊達にや冠らぬ猫頭布  
 紅蓮の猛火空を焼く  
 意氣を命の男立
- 二、大御心をひとすちに  
 纏のかげに緋櫻の  
 しかといたゞく猫頭布  
 花に散るべきいのちかな
- 三、まどひの譽れ袴纏の  
 男冥利のこのからだ  
 襟のしるしを神かけて  
 捨てよ世の爲め人のため
- 四、振りこめく大纏  
 勢のばれんいさぎよく  
 焦熱地獄の底までも  
 うづまき渦まく心よさ



同

(二)

水防火防を保護するは  
 事ある時を忘るゝな  
 勇を勵まし氣を鼓舞し  
 ラツバの聲と諸どもに  
 旗ごまどひを先頭に  
 ガンリン唧筒手あおりや  
 如何に烈火も何んの其の  
 身を惜まず奮闘し  
 人に後れて恥かくな  
 譽れは長き宮川の

消防組の責務なり  
 若も事ある其時は  
 打出す鐘に耳を止め  
 足の堅めを逸早く  
 つゞく梯子に鳶口ぞ  
 さすまたかけやうちけしぞ  
 如何に逆まく煙にも  
 盡せやく一筋に  
 嗚呼これぞ消防の  
 勳は高し高山ぞ

手毬うた

一、いづくのいづこめの番頭さん 木綿は一反いくらだね、三百三十三夕、もちどまか  
 らかちやからかほい、ヒーヤ、フーヤ、ミーヤ、ヨーヤ、よんく櫻の千本櫻に雀が  
 三羽とまつて、一羽の雀は嫁入なさる、二羽の雀は婿入なされ、三羽の雀は鳩におは

れて、ちよつとなきらよつとなき、あれやほんくぼ、これやほんくぼ、ほんどふ  
 くれたてんまりは二階上つててんまりつくのがお正月お正月、おやかーくーし  
 二、けーばや、あけばや、おしろいけばや、べつたりけばつておはぐるつて、おはぐる  
 つけて、口紅さいて、口紅さいて目紅さいて目紅さいて、前髪結ふて、前髪結ふて  
 おつとを出いて、おつとを出いて、おびんを出いて、おびんを出いて、かつやま結ふ  
 てかつやま結ふて、いたこをかけて、いたこをかけて、かんざしして、かんざし  
 して、かうがいさいて、かうがいさいておくしをさいて、これでしまひの襦子の帯  
 。

三、おらがおもてに米屋が御座る、米や娘が三人御座る一人の娘は藤やへ嫁入藤にまかれ  
 て寝てばか御座る。一人の娘は蜂がへ嫁入蜂にさゝれてねてばかござる、一人の娘は  
 京都へ嫁入京で一番、大阪で二番、佐賀で三番吉野の四番、五條で五番の姉様たちが  
 しやらりくごあよばんすれば村の若衆に抱きとめられておきやれはなされ帯きらし  
 やるな、帯の切れたは結びもなるが、えんの切れたは結ばれぬ。

四、おらが大事なお手毬様を、紙で包んでこよりでしめて、しめたところにいるはど書い  
 て赤紙づくしか白紙づくしかとなり近所の誰々さんから誰々様へお渡し申します。た  
 しかにく受取申します。



五、よんべもらつた花嫁は、おめし八杯汁五杯生酢七血酒三升こい茶のてばなを七やかん  
いり豆かし豆七おしきこれじやたまらぬ出て行きやれ、うらの細道だりやつけたお春  
作藏のおと娘あの子アよい子じやまよな子じやおらがおかゝになるならば下駄をはか  
せて皮足袋で馬に乗りたか千兩のうまに籠に乗りたか千兩の籠に。

六、大黒様といふ人は一に俵をふんまいて二につこり笑ふて三に盃手にうけて四つ世の  
中よいやうに、五ついつもの六徳に六つむりよう息災に七つ何事ないやうに、八つ屋  
敷をひろめたて、九つ小倉を打ち立て、十でどんくおさまつたく、かんきのうら  
／＼お爺やお婆やお茶碗けつからかいてかごで一勺、かごで二勺。おすすりく一杯  
すいませう、二杯すいませう、三杯すいませう、四杯すいませう、五杯すいませう、  
六杯すいませう、七杯すいませう、八杯すいませう、九杯すいませう、十杯すいませ  
う。

七、一<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シ、二<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シ、三<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シ、四<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シ、五<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シ……………九<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シちようど兆百  
ついたとさ一<sup>ト</sup>ン十<sup>ジュ</sup>シ……………二百<sup>ト</sup>ついたとさ……………九百<sup>ト</sup>ついたとさ(中畧)  
一貫<sup>ト</sup>ついたとさ……………二貫<sup>ト</sup>ついたとさ。

八、いもくの芋屋さん お芋は一升いくらだねーへ 三百三十三<sup>ト</sup>もちどまからかちや  
からかほい ヒーヤ フーヤ ミーヤ ヨーヤ 四番目には断り申します。

九、おらが叔母様えんから御座る 菊やぼたんや 手毬の花や 行けばよう来た上れとお  
しやる。おしやる言葉は有難けれど腹におる子が七月八月、もしも此の子が男の子な  
ら大小さゝせて袴着せて 寺へのぼせて手習させて寺のおみ堂でしやくとらしよ し  
やくとらしよ しやくの取りやうが悪るければ めんば持たせてつんづり着せて 乞  
食仲間にやるまいか。

一〇、おらが弟の 千松は、長い刀をさしたがる。長い刀をさしたけりや、向ふの小山のほ  
うの木を切つて倒いて枝もぎて、木挽たのんで挽割つて大工頼んで かなげすり塗  
や頼んでぬりたて、其れを刀としてさして、向ふ小山の馬攻めに馬の攻めよはよけれ  
ども高い所も七所、低い所も七所高い所から落されて竹のとぐしで胸ついて其れがひ  
ようしで死んだなら石やばんばで墓をつき墓のしるしに松を植え誰が墓じやといふた  
なら千松墓じやといふておくれ。

一一、とやま三番町ののたのしいの五兵衛さが川へ 這入て死なうか西をおがんで首しめよ  
かさいの川原地蔵ぼさつ。

子守うた

一、ねんくころりと寝てさへくれりや 守もらくじやが子もらくじや ねんくころり



と寝る子は可愛い 起きて泣く子はつら憎い。

二、ねーや こーやあ ねいやこやあ ひつして寝た子のかあいさよ。

三、ねんねやこんこやねーやこやあ、ねんねの守さはごーこへ行つたあ、山こし、川越し  
里へいつた。里のみやげは何じやつたあ でんく太鼓に笙の笛吹いてたゝいて慰さ  
ましょ、ピーヤく風車。

四、雨は降るく 宮川止る かはい子は泣きく日は暮れる。

五、お前一人かつれ衆は無いか つれ衆あ あとから籠で来る。

六、うそをついたり告げ口したり、死んで行く時あ火の車。

七、かあい誰さん(子供の名)にくれないものは いたこ簪塗りぶくり。

八、いざや子供衆 花をんに行かまいか。

何花をんに、菊や、ばたんや、てまりの花を、一本折つて腰にさし、二本折つて肩に  
さし。三本折つて手に持ち、四本目に日が暮れて、鳥の宿にとまろうか、鳥の宿にし  
らみをる。雀の宿にとまらうか、雀の宿にのみがをる。鳶の宿にとまらうか、鳶の宿  
にとまつて朝起きて見たら、向ひの山に猿が三匹をつてすり鉢かぶつてすりこぎさい  
てをつたさ。

お手玉うた

一、おひと おふた おみえ およーを おなか おくゝみ おぬけ おつきりしよ お  
すか ごちよ おかまぶせ うまのり おけしよ お紅に すみすり 千鳥 かま  
きり なつたきり 橋かへ ゐごかへ おつさらへ(呼聲)

二、だんなしく 一ちよかけだんなし だんなしく 二ちよかけだんなし だんなし  
く 三ちよかけだんなし (以下畧)

三、おちやみ お一つくくおろして おつさらへ

お二つくくく おろして おつさらへ

お三つくくく おろして おつさらへ おみんなおつさらへ

お手しやみくく おろして おつさらへ

おはさみくく おろして おつさらへ

おちりんくく おろして おつさらへ

おひだりくく だりくく

なかきつて つまよせ おつさらへ

だいきち しやうきち おつさらへ



しいぶくくく　まめきつて　おつさらへ  
 おつてんぶしくく　きりしよ　おつさらへ  
 てまたまきくく　おてまたき  
 やね越しくく　きりしよ　おつさらへ  
 ちい橋くぐれくく　きりしよ　おつさらへ  
 大橋くぐれくく　きりしよ　おつさらへ  
 しやらりんことほして　ごいつくれた  
 おしごつやのおむすめ  
 お二つやのおむすめ  
 お三つやのおむすめ  
 お四つやのおむすめ  
 お五つやのおむすめ  
 お六つやのおむすめ  
 おつさらへ　ごつこいしよ(右)　おつさらへ　ごつこいしよ(左)  
 おつさらへく。

稚 兒 歌

一、ちゆう来い　があ来い　あつぼくれるに來い。  
 二、鳥はがあく　勘三郎　雀は忠々忠三郎。  
 三、鳩は八幡耳くさり　鳶は信濃の鐘たつき。  
 四、あの鳥先行けわりが家が焼けるにばどかけ小便かけよざー。  
 五、鳶々まひくしよ、あさつての市にあかいべを買つてくれるに。  
 六、どんぼく尻切つて逃がせ。  
 七、あんがり　さんがり　米一升ついてくれ。  
 八、つー　つー　つんすりさせ。  
 九、爺さいの婆さいの蜂がぶんとさいたいの。  
 わりやごうして逃げなんだ　おりもよつぼど逃げたれど　とびつきはねつきさいたいの。

一〇、空見りや虫よ　下見りや雪よ　中徳利藤右衛門さ。  
 一一、正月ア善イぼんより善い木履の齒のやうな餅食つて　善いーこぶ食つて。  
 一二、みかんきんかん酒のかん　かしのらんかんやねふかん　親のせつかん子はきかん。



- 一三、だまりだんべにみそつけてかぢれ。
- 一四、とくふく 貧乏 幸 金持。
- 一五、おさんだてこき尻ふり女房。イヤ  
今カハヤリシイ 證據
- 一六、ざいごの二十一ほうかぶり。
- 一七、千島のチリンコ仲よく五りんこ。イタレ  
一多前 心也 ヨサトミ
- 一八、嫁さく尻がちよつこりえがんだ。太腹ヲハリニツノカヒナデカヲカヒツム
- 一九、お月様幾つ十三七つ、まんだ年や若い、あの子を産んで、この子を産んでお萬にだか  
しよ、お萬は油買に茶買に油屋の前ですべつてころんで赤いものむき出した赤ものな  
んじや 赤いべのそよよ 青いものなんじや 青いべのそよよ。
- 二〇、七夕のかんじんまた來年ござれ。  
我モマタ下ニ獨身ノカラ入レ
- 二一、おほばこばこやぶれんやうに頼む。コレが多クはトナルンガ  
トナルンガ
- 二二、つーぼんだ つぼんだ 何の花つぼんだ、蓮の花つぼんだ。  
つぼんだと思ふ間にさつと又ひーらいた、ひーらいたく何の花ひらいた蓮の花開い  
た、開いたと思ふ間にさつとまたつーぼんだ。
- 二三、哀れな事じやものだりか一人ぬーけんぼのぼのぼ。
- 二四、中のくこんもんそ、なんせ脊が低い。

果ハ性ヲ  
ボケルモ  
イハレ  
ナクイ  
コトハ  
天カ  
イ

- 一、たひやゑびくつてそんで脊が低い、頭のさらに五さら六さら七さら八さら九さら十  
さら十さらの上にあつゝをすゑて あつや かなしや なんまんだぶつ。
- 二、石やカイツカイツまんま食つてカイツカイ何んかくれんどぐつかいてくれるぞ。
- 三、雛様見せてくれおぞてもほめるに。
- 四、ちちくなりくやぶれんやうに頼む。
- 五、山々の山寺の和尚さんは鐘つきしやうばい びつくり しやつくりと。
- 六、お前の心と私の心と合ふか合はぬか合せて見まひかよく合ひましたよく合ひました。
- 七、ばくさんく牛と馬どかへまいかいなごうく。
- 八、ゆらさんこつちお手の鳴る方へお出でなさい。
- 九、あーばよさばよ又來年ござれ。
- 一〇、爺婆寝どれ 兄にや起きて山へ行け 嫁起きて火たけ
- 一一、愛宕様へ詣つてまげ坂下りて 目屋へ寄つて花一本盗んでほうばで叱られて あれ口  
おしや胸んなことや おへそが笑ふ。
- 一二、大川小川の子がほしや誰さん(向ふの子供の名を云ふ)を ほしや。  
何くれて養ふ まん十くれて養ふ まん十むしに毒じや 鯛の骨なし いか取つてく  
れる。〇さしていこそ 〇〇させていこそ。



甘イモノハ茨山アル併シ精液ヲ出サセル能

三、正月の神様何處まで御座つた きりく山の下まで御座つた。 甘イモノハ又トツンマ

三、リリ李鴻章の禿頭 ママまんぢゆ食つて皮残す ススすりこぎ頭に灸すへて テテ帝

國萬歳大勝利 リリ……(前を繰返す)

三、ひんち くどんちく どんがさいて なもはも はんがり をごこ衆 茶碗におたふ  
くすつべらぼん。

三、おりも仲間松泰寺 お前悪いで千光寺 せつたてだじやない 大雄寺 うちいつて  
かかまに宗猷寺 頭の三つも國分寺。

四、此所はごこの細道じや 天神様の細道じや ごうか通して下しやんせ此の子の七つの  
お祝にお札を流しに参ります、通りやんせく行きはよいけご歸りはこわい、いとて  
もしらんく。

四、櫻々やよひの空を見渡す限りいざよく見にゆかぬ。

四、ぼうさんくごこ行くの 私はたんぼへ稻刈に 私も一所につれていて お前が来る  
と邪魔になる 此のかんくぼうづ くそぼうち後の正面だあれ。

四、内のちやめ子は ほんとに困るね困るね 臺所するのに涙がぼろくく 其の涙を  
袂でふいてねふいてね、ふいた袂を川へ持て、洗ひませう洗ひませう。洗つた袂を竿  
へ持つて、掛けませう掛けませう、ほせた袂を簞筒に入れませう入れませう入れた袂

を鼠ががぢくく其の袂を屑屋へ賣りませううりませう。賣つたお金がないので困るね  
く。

四、かこのめく籠の中の鳥はいつまで遊ぶ 夜明の頃に あさつきかけてなんとかすう  
る。

かぞへうた

一、一つとえーの女子のな一人もんじん米の町米屋の娘のおるいとて

此の唐人もおもようかいな。

二つとえーの女子のな二人兄弟ある中をつれて走るの面白さ

此の唐人もおもようかいな。

三つとえーの女子のな見たい逢ひたいふじの山忍ぶでなければ逢ませぬ

此の唐人もおもようかいな。

四つとえーの女子のな吉原子供衆が手毬つきてまりの拍子の面白さ

此の唐人もおもようかいな。

五つとえーの女子のないつももんしんなるたばこおるいにのませて喜ばしよ

此の唐人もおもようかいな。

六つとえーの女子のなむくげの花咲く二度咲くにおるいの花はなせ咲かぬ

此の唐人もおもようかいな。



七つとえーの女子のな何を言ふにも語るにもおるいがけんごで語らせぬ

此の唐人もおもようかいな。

八つとえーの女子のなやしき廣めて部屋建ておるいと吉三となくさましよ

此の唐人もおもようかいな。

九つとえーの女子のな此所で死んだら何所で逢ふ極樂浄土の道で逢ふ

此の唐人もおもようかいな。

十とえーの女子のな遠いとやまへ行くよりも近いとやまで年なさりよ

此の唐人もおもようかいな。

十一とえーの女子のな一夜作りの其酒をおるいにのませて喜ばしよ

此の唐人もおもようかいな。

十二とえーの女子のな十二ひとえの八重ざくら一枚おくれと吉三さん

此の唐人もおもようかいな。

十三とえーの女子のなおるいは十三産をする後先たのむよ吉三さん

此の唐人もおもようかいな。

十四とえーの女子のな白い木綿を四尺ばかりかようもいこいた吉三さん

此の唐人もおもようかいな。

十五とえーの女子のな五人の男を持つたれど中でよいのは吉三さん

此の唐人もおもようかいな。

十六とえー女子のな十六おかめに穴あけて手やら足やら心やら

此の唐人もおもようかいな。

十七とえーの女子のな十七七夜のかみそりをようもいこいた吉三さん

此の唐人もおもようかいな。

十八とえーの女子のな八幡地獄へ落ちたれど此程こわいと知らなんだ

此の唐人もおもようかいな。

十九とえーの女子のな暗い所へ入れられてむごいことよな吉三さん

此の唐人もおもようかいな。

二十とえーの女子のな苦いくすりを呑んだれど此程苦いと知らなんだ

此の唐人もおもようかいな。

二十一とえーの女子のな二十一日申せば長うござるこれでしまひのかぞへ歌

此の唐人もおもようかいな。

二、一つひよこは 米の飯

二つふなばし船頭さんが

三つ皆さんが子供衆が

四つ横濱いじんさで

五つ醫者様薬箱

てーんこてんこ  
てーんこてんこ  
てーんこてんこ  
てーんこてんこ  
てーんこてんこ



- 六つむかしは鏡で  
てーんこてんこ
- 七つ泣きびそは蜂がさいて  
てーんこてんこ
- 八つやきいもうまいが  
てーんこてんこ
- 九つ乞食は椀持つて  
てーんこてんこ
- 十で殿様うまに乗つて  
てーんこてんこ
- 十一巡査は繩持つて  
てーんこてんこ
- 十二重箱おはぎが  
てーんこてんこ
- 十三さかすき お酒が  
てーんこてんこ
- 十四島田はおはやり  
てーんこてんこ
- 十五極樂佛さま  
てーんこてんこ
- 十六六兵衛さんがとんで出て  
てーんこてんこ
- 十七質屋は金貸す  
てーんこてんこ
- 十八はつか玉からいが  
てーんこてんこ
- 十九熊襲がそむいて  
てーんこてんこ
- 二十握飯うまいが  
てーんこてんこ

田 植 う た

- 一、田植ならこそ 壺平すゑて あひにや壺平だりやすゑす
- 二、田さへ植ゑたら田の草程は 取らせまいよ我が妻に
- 三、元氣でたのむ仕事元氣についても
- 四、ごなたも頼む 早くしまへりや ぞつちもよい
- 五、歌ひなさりよよ お歌ひなさりよ 歌でおきりよが下りやせぬ
- 六、誰番じややら お城太鼓の音のよさよ
- 七、天氣よければ大垣様の 城の太鼓の音のよさよ
- 八、音のよいはずよ おらがどのまの番じやもの
- 九、枯木じやとても藤が捲きつきや花が咲く
- 一〇、泣くなど事よ水枕のよごれるに
- 一一、販る事じやおりも仲間にしておくれ
- 一二、ばゞさまが こしやく／＼走り何處でまい茶が煮えたやら
- 一三、蟬が鳴く／＼千光寺山で 下保桐山よいとなく
- 一四、雨が降れ／＼七十と五日大阪てんま(傳馬)の止む程に



- 一五、大阪てんまは止んでもよいが七十と五日の雨がいや
- 一六、ごやしまくれ裏の田圃へ獅子が出た

桑摘のうた

- 一、思ひ直して又来ておくれ鳥も枯木に二度とまる  
(其他田植歌をこの節で唄ふ事あり)

草刈うた

- 一、馬に乗る人大名といはゞ夏の草刈皆大名
- 二、鎌がきれねばとぎてもやるが、わしがとぎたといやるなよ

糸ひきうた

- 一、いくらしやれても町のものわかる米の高い時や目がくぼむ
- 二、糸を繰るよな辛氣なことを誰が教へたやれとのさ
- 三、ひいてお呉れよくるくど

(いろく歌ふので定りたるものなし)

木やりうた

- 一、もう押うかいな もう押うかいな もうおすと云ふても何もない オイ
- 二、向町の比企尼が親も持たず 子も持す二十日鼠をどらまへてさかゆきそへて髪結ふて  
錢を三文持たせて鱒を買ひにやつたれば猫に取られて……ヤット皆さん方よ
- イ、やつと皆さん方よオイくそりやひいてくれ
- ロ、大もちや寝込んだオイくそりや頼むぞよ
- ハ、大もちやひかでもオイくそりや受聲しよ

石場かちうた

やーとこせ よいやな

ありやくのこりはいせー さゝなんでもせー

引分れうた

- 一、高い山から谷底見ればの

うりや茄子びの花盛り

ありも ヨーイヨイくヨ こりも ヨーイヨイくヨ



二、あの子よい子じや ぼたもち 顔よ

きなこつけたらなほよからう

ありも ヨーイ ヨイくヨ こりも ヨーイヨイくヨ

蝨狩うた

一、蝨こい チチくれる 山んばこい 宿かせる

あつちの水は 苦いぞ

こつちの水は 甘いぞ

一、蝨来い 山んば来い あつちの水は苦いぞ

こつちの水は甘いぞ ほつたる来い 山んば来い

一、ほつたるこい やまぶしこい あつちの水あ苦いぞ こつちの水あ

甘いぞ ほたるくたつてこい

風上げうた

一、どう神く 風いこせ

風をいこさにや山とめる

おみきを 一杯上げますに

風をどうぞと おくれんさい

二、風々上がれ 雲まで上れ 天まで上れ

三、お山のく山神様 お風をどうぞくどおくれんさい

お酒を一杯上げますに

酒場うた

一、若松様よ枝も榮ゆる葉も茂る

めれたくの若松様よ枝も榮ゆる葉も茂る

呑めよ騒げよ一寸先は暗よ音にたてたる倉もなし

大津繪節

東海道宿續き

品川	川崎	神奈川	程ヶ谷	戸塚	藤澤	平塚
大磯	小田原	箱根	三島	沼津	原	吉原
蒲原	由比	興津	江尻	府中	丸子	岡部
藤枝	島田	金谷	日坂	掛川	袋井	見付



濱松	舞坂	新居	白須賀	二川	吉田	御油
赤坂	藤川	岡崎	散立	鳴海	宮	桑名
四日市	石薬師	庄野	龜山	關	坂ノ下	土山
水口	石部	草津	大津	京ノ町		

○大坂を立ちのいて二人の姿が目立たば垂籠に身をやつし奈良の旅籠屋三輪の茶屋五七三日逗留して二十日餘りに四十五兩使ひ果して二分残る金より大事な忠兵衛さん罪人に落しましたも皆んな私故さぞお腹が立ちませうが因果づくじやとあきらめくだしやんせそれがウツナラドヂョノ子を見やんせ親がくぢれば子もくぢる。

○縁かいな

- 一、春の花見は城山で夏の涼みは鍛冶屋橋秋の紅葉は松泰寺おかめが取持つ縁かいな
- 二、春の花見は向嶋梅の香で鶯がほけきようと鳴いたがえんかいな
- 三、夏の涼みは兩國の出舟入舟屋形舟 上る流星星下り 玉屋が取持つえんかいな
- 四、秋の夜長に差向ひちわがこうじて脊と脊晴れて差込む硝子窓月が取持つえんかいな
- 五、冬の寒さに置炬燵 屏風が戀の仲立ちでつもる口舌はねてとける雪が取持つえんかいな

新曲 四季の高山

本調子 世を春に霞の衣装ひて姿氣高き位山 合山王まつりの太鼓の音に 合花が咲きます城山に、獅子ヨ合屋臺ヨかんかくかん合祭り自慢の山の町合河岸の柳がもつれて解けて、戀の鍛冶橋炎も消ゆる合吹けよ川風夕涼み合二上り秋榮ゆる錦の山におツ月様笑ふ合盆にや踊らまいか八幡様でヤットコセ合七日七夜はまだ物足らぬ合豊年じや合萬作じや合降り積る雪は銀世界合御座れ箱籠忍びの幌で浮世はなれて炬燵酒合斐太匠、うつ墨繩の一すじに合千尋八千尋萬代と盡せぬ四季の眺めをば合目出度くの若松様で、拍子揃へて謳ふ里人。

○輪島節

小鳥白川六厩のお寺 こけら葺とは知らなんだ  
 目出度くの若松さまの 枝もさかへる葉も茂る  
 枝が榮えて葉が茂りやこそ 人は若松様といふ  
 これのやかたは目出度やかた鶴が御門に巢をかける  
 酒によたく五勺の酒に 一合のんだら ゆらのすけ  
 酒はよいもの氣を勇ませて顔へ五色のいろを出す  
 花の盛りに真どめられて 何時が花やら盛りやら



とほくはなれて枯木に螢 水にこがれてゐるはいな  
 花が咲いたよなんどの隅に するはとげまいかきつばた  
 不二の雪さへとけると聞くに 心一つがとけぬとは  
 はやし、負んだ子も抱いた子も お前の子じやもの  
 たいてであるまい 氣永にしなさりよ。

○小原節

鳥もかよはぬやけだけなれど住めば都に思はれる  
 まぐさせをった乙女のせなで鳴いてゐるそへくつわ虫  
 こひにこがれて鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身をこがす  
 下へくと枯木を流す 流す枯木に花が咲く

浮いたか瓢箪軽るそに流れる 行く先きや知らねどあの氣になりたや  
 東京生れで横濱育ち今は田舎で苦勞する

ドンチャンすきなならお茶屋の子になれ朝から晩までドンチャンく  
 小原小原節どこでもはやる わけて此の地は尙はやる

ドッコイサとどるのが田舎の相撲だよ田舎の相撲でも三度目が勝負  
 瀬田の唐橋トツチンカッチントテチンが高ナシ

古金安なしたゝいてのばいた唐金ぎぼし水に影さす大原瀬々の城

はやりうた

1 中橋詰で眺むれば城山公園が真正面 春の花見の二人連

瓢箪かつねて ウントドッコイシヨ

2 鍛冶橋詰で眺むれば文右衛門坂が真正面 お寺参りの爺さんが

杖を力に ウントドッコイシヨ

3 花岡町で眺むれば鋤をかつねて爺さんが

鋤を力に ウントドッコイシヨ

1 高山の音に名高き花柳界行先何處げに面白き茶屋遊び

洲岬に伊勢本 島田に金龜館行くなら行けく

チャート行け チャットネ

2 高山の音に名高き湯屋遊び行く先何處平湯に蒲田に松ノ木湯

行けく行くならチャート行けチャットネ

3 秋の夜に意氣な二人が弘法山見る先や月夜げに面白き散歩して

包みきれない ハンカチフ チャットネ



4 五月雨の姿やさしき兄弟の行く先我家げに怨みある父の仇

工藤左衛門祐經をうつならうてく

チャートウテチャトネ

○甚句

私とお前とそふなれば どのよな高瀬へ飛ぶとても

金々樓でもこしらへて たるとたらんの其時にや

私のきる物質に入れちつとも早う松々の身の 國分寺と思へども

こゝが思案のかちやはし 末が末まで 川原町

かたい約束 石浦の 一の宮へと願をかけ 上りつめたか宮峠

久々野 渚をこすとても小坂こすのもいとやせぬ

○新東雲

飛驒の訛はオバサー、アバエナ又クルワイ、ナ それから ドウシタネ ムテンクテ

ンニ オラ、コーワイ ホントカエ ウソジヤロウ ソヤケド ウタテイナ テナ

コト コキンサツタカネ

○サノサ節

高山ちよい出りやネ 保木に追分、古川、船津、茂住で籠に乗りく肩に掛け、笹津

橋越しやネ 大久保よ 向ふに見ゆるは富山ステイション。

○ギツチオンチオン節

お婆々何處へ行きやるな 三升樽さげてギツチオンチオンく 嫁の在所へ孫だきに

ホリヤおやまか、げいしやか わかりやせぬギツチオンチオンく

丸い玉子も切りよで四角くく 物も言ひやうで角が立つ ホリヤげい者か おや

まかおやまかげい者か わかりやせぬくく

民謡 古大臣

(此歌の出所は白川村なり)

きりよ(器量容貌を言ふ)がサヨ

良いとてけんたい(尊大に構へるを言ふ)おーきやれ

深山奥山そのおくやーまの岩に咲いたる千重のつーつじ

なんぼ(何程の意)きりよよく咲いたとてー人が手を出さにやー

その身そーのまゝではーて(果る)る サーヨ

おらが サーヨ

おせどのしよろく川に昔しや蛇が棲む今龜が棲む



龜も龜じやが人取る龜じや昨日は四人取つた今日は五人取りやつた  
合せ申せば九人の家内そやに（そのやうに）  
取つてくれちや人の種にや絶える

サーヨ

おらが サーヨ

おせごに蜂が巢をかけた蜂も蜂じやが足なが蜂で

足が六本あるはねが四枚ござる顔に目がある尻に針がござる

おらと殿さごはい（御拜寺の階前を言ふ）の下で

信の話しをして居るところを（所をの意）殿の頭をしつくりやと塾いた

おらも其の時や死のかやに思つた

サーヨ

おらは サーヨ

お前に頼みがござる頼みござらば手づるし（手印の意）おくれ

鏡やらうか簪やらうか 鏡よけれど縁が切れる

銀の簪光りが強いおうめ（青梅織物のこと）やらうかよさんどめ（織物のこと）やらうか

おうめさんどめ人目に障る 簞笥やらうかよ長持やらうか

簞笥長持ち荷物にかゝる後生の道ならず（珠數）入りおくれ

サーヨ

おらが サーヨ

隣の八兵衛のばゞさ 年は九十九で嫁入りなさる

前歯二枚におはぐろつけて白髪三すしに黒びんつけつけて

ばゞさおきやれと孫子の意見 おきてならんよ出雲の神が

結ばしやんした 縁じやもの

サーヨ

今年 サーヨ

始めて南瓜を作る一の花なり（初なりの意）御寺へ上げる

二番三番なり一親類へ配る 四番五番なりや内で煮てたべる

其れの南瓜にだりや爪たてる 爪はたてたはかまいはないが

夜這ひ歸りか憎く御座る

サーヨ

おらごさ サーヨ

おそよの歌約束は歌で通るになせ出て逢はぬ心がはりがしたかよおそよ  
心變りは致さぬけれど今よい旦那に客受けられてお茶の通ひで

暇のて出れぬ

サーヨ

一つひよう衆は鳶口祝ふ

二つ船衆は帆柱祝ふ



- 三つ味噌屋は世間を祝ふ
- 四つ夜這奴は暗の夜を祝ふ
- 五つ醫者衆はたんす箱祝ふ
- 六つ聳衆は姑を祝ふ
- 七つ名主は大官祝ふ
- 八つ山法師やほら貝祝ふ
- 九つ紺屋は藍がめ祝ふ
- 十デヤ杜氏は酒かめ祝ふ

一つ サーヨー

サーヨー

炭焼き樂さうに見える

二つ二度フタタビこんなしやうばいせまい

三つ見る間に竈の炭やおこる

四つ斧鉦ヨキナクとがねばならん

五つ何時もかも油断はならぬ

六つ無理焼炭や細まこなる

七つ泣き／＼かま木を寄せて

八つ焼いた炭値段が安い

九つ此の山地代が高い

十でどつくり勘定すれば

嬬の腰巻買ふ錢もない

一つ サーヨー

拾つた豆やてまいの豆よ

二つ踏んだ豆や土のついた豆よ

三つ味噌豆やふわけた豆よ

四つ選つた豆や屑のない豆よ

五ついつた豆や腰のきれた豆よ

六つむいた豆や皮のない豆よ

七つなつた豆や莢のついた豆よ

八つ焼いた豆や灰になつた豆よ

九つ焦げた豆や炭になつた豆よ

十で飛んだ豆やそばにない豆よ

サーヨー

### 宮村の民謡俗謡

#### 田植歌

一、うぐひす鳴けば 遙かにおしやる

何時も此の洞奥で鳴く

二、寝ての念佛起きてのつとめ 若うて離れた妻のため

#### 桑摘みのうた

一、桑をもりやるか おこがひよいか 若い糸挽やとやるか

二、そわれまいなら お暇をおくれ おらもおまへとわかえまね

三、今年しや豊年穂に穂がさがる 升はとりおきみではかる

#### 手毬うた



大事をばさま 大事でんまる 殊に今日 お借り申して水もつかず何んにもつかず  
に隣り近所のお花様から お千代様へご お渡し申します  
たしかに〜 受取申します

子守うた

ねんねや こんこや ねんねこや ねんねの お守は何處へ行つた  
山越へて里へ行つた 里の土産は 何じやつた でん〜太鼓に笙の笛  
吹いてた〜いて喜ばしよ

蚕狩うた

はたるこい 太郎こい 山節こい 宿かせる そつちの水苦いぞ  
こつちの水 甘いね 蚕こい 太郎こい

木やりうた

(其の場限りの引き付けによきものを唄ふから定まりたるものなし)

糸挽うた

益田糸挽き何時頃歸る おそて九月の中頃

白ひきうた

お寺詣りより白ひかまいか 二升と三升ひきや五升になる

凧あげのうた

どう神〜風いこせ 風をいこさにや山どめる

河原の風と山の風 ざんざんおくれんさい

神代踊の歌謡歌詞

白菅踊

イ、(音頭) 白菅笠の

(踊子) 破れるも惜しや

しのばれ妻の笠じやもの

返し

(音頭) 妻のつまの



(踊子) しのばれ 妻の

口の(音頭) しのばれ妻の笠じやもの  
これから見れば

(踊子) 近江がみえる

笠買ふて給れ近江笠

(音頭) 近江の笠は

(踊子) 冠りよて着よて

締緒が長うて きよござる

(音頭) せんじやう 踊りや

(踊子) やれ花が散る

いざや引こよこの庭を

返し

(音頭) 引こよ 引こよ

(踊子) いざさら引こよ

いざひこよこの庭を

池田踊

イ、(音頭)

(踊子) 池田小女郎は

細布織りやる

返し

(音頭) 小女郎は

(踊子) 細布織りやる

横が足らぬで まだ織れぬ

口の(音頭) 向ひ七夕

(踊子) おいとしやないか

川を隔て、聲を召す

返し

(音頭) 向ひ七夕

(踊子) おいとしやないか

川を隔て、聲を召す

(音頭) あまり踊れば

(踊子) 花が散る



寄れく踊

いざや引きやれこの庭を

イ、(音頭)

寄れくそねたるこそよけれ

(踊子)

子がたゞあいの場所垣根

返し

(音頭)

よれとねたるこそよけれ

(踊子)

子がたゞあいの場所垣よ

ロ、(音頭)

此の山奥の一もとすゝき

(踊子)

えんやらやあと引けど根がきれぬ

返し

(音頭)

引けどえんやらやうと引けど

(踊子)

えんやらやあと引けど根がきれぬ

ハ、(音頭)

せぬじやうに踊りや やれ花が散る

(踊子)

いざさら引こよ この庭を

返し

(音頭)

引こよ引こよいざさら引こよ

天戸開

(踊子)

いざさら引こよこの庭を

イ、(音頭)

日輪様は天戸を開き

(踊子)

此の世を照しおめでたや

返し

(音頭)

様は天戸を開き

(踊子)

此の世を照しおめでたや

ロ、(音頭)

今宵は盆の十六日よ

(踊子)

早や夜が明けて鳥が鳴く

返し

(音頭)

盆の十六日を

(踊子)

早や夜が明けて鳥が鳴く

ハ、(音頭)

せぬじやうに踊りや やれ花が散る

(踊子)

いざさら引こよ此の庭を

返し

(音頭)

踊りややれ花が散る



髭

踊

(踊子)

いざさら引こよこの庭を

イ、(音頭)

ひげでないものひげじやおしやる

(踊子)

髭の爺さまのやれ口はひげよそよ／＼ひげよそよ／＼

返し

(音頭)

ひげじやおしやる

(踊子)

髭のじさまのやれ口やひげよそよ／＼ひげで

そよ／＼／＼やれこの口はひげよ

ロ、(音頭)

お十七八をやれやぐらへとのせて

(踊子)

下から見ればぼけの花

返し

(音頭)

やぐらへとのせて

(踊子)

下から見ればやれぼけの花

ハ、(音頭)

あまり踊ればやれ花が散る

(踊子)

いざよ引こやれ やれ／＼この庭を

返し

綾

踊

(音頭)

やれ花が散る

(踊子)

いざよ引こやれやれ／＼この庭を

イ、(音頭)

向ひ七夕

(踊子)

おいとしやないか川をへだて、

返し

(音頭)

おいとしやないか

(踊子)

川を隔て、

ロ、(音頭)

向ひ七夕

(踊子)

おいとしやないか川を隔て、

返し

(音頭)

おいとしやないか

(踊子)

川を隔て、

ハ、(音頭)

あまり踊れば

(踊子)

やれ花が散るいざよひこやれ

返し



(音頭) やれ花が散る

(踊子) いざよ引こやれ

註

一、沿革 神代踊は飛騨の一之宮水無神社九月二十五日の祭禮に行はるゝものでお旅所と神門前まで演ぜられる、往時挽歌を奏して踊つたものでないかとの説がある。

二、舞踊の實際 舞踊者の数は一定せず、一文字笠を冠り、黒の紋付羽織を着流し、白足袋に紙緒の草履を穿つ、音頭役は三度笠を冠り、別の上臈と稱して花笠を冠り女裝した青年四人圓形の中に加はる。圓の中には替固役ありて監督す。樂器は全然なく、持物は白扇、但綾踊に限り竹に赤と青の紙を巻きたる綾を用ひ、一切女子を雜へず。

### 大八賀村の民謡

#### や り 踊

○ひねり

音頭 (さうざい(大將) ひねりじやが(副將) おほさてがつてんじや(一同合唱))

一、高い山から谷底見ればよお瓜や茄子びの花盛り

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

二、三墓山からの三川見ればよお お萬可愛や布晒す

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

三、踊らまいかよ二之宮様でよお 神に御馳走の槍躍り

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

四、九月四日は三社の祭 老も若いも神の前

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

五、お婆々何所へ行きやる三升樽提げて嫁の在所へ孫抱きに

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

六、俺らがお爺の禿けたる頭よお よきで切るよな毛が生えた

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

七、あの子よい子じやばた餅顔できなこついたら尙よかる

アリハヨイ〜〜マタドン〜〜

○手ちがひ

音頭 (さうざい(大將) てらがひじやが(副將) おほさてがつてんじや(一同合唱))

一、おまいとならばどこまでも山奥のさいかちいばらの中までも

オチャエー オチャエー

二、おちや屋の二階で拳を打つ勝てばよし勝たねば女郎の買ひおさめ

オチャエー オチャエー

三、げんぶく山の朝日影美しや 高根の松にびか〜と

オチャエー オチャエー



- 四、お茶屋の浦の梨の木で蟬が鳴く何んと鳴くあねまの白歯が氣にかゝる  
オチャエー オチャエー
- 五、姉まの部屋を今朝見れば縹子の帯七すじ八すじかけてある  
オチャエー オチャエー
- 六、姉まの腰の巾着は天鷲絨かな天鷲絨ぢやないが熊の皮  
オチャエー オチャエー
- 七、おまへは待ちくかやの外蚊にくはれ七つの鐘の鳴るまでに  
オチャエー オチャエー
- 八、大八賀川の水引いて田を作りや穂に穂が咲いてよく實る  
オチャエー オチャエー
- 九、おちや死んだなせ死んだ佐太郎が菜畑で刺し殺いた  
オチャエー オチャエー

○あんそり

音頭(さうざい(大将))  
てらがひじやがーがつてんか(副將)  
おほさてがつてんじや(一同合唱)

アンソリ	アンソリ	アンソウリソウリ
アンソコ	アンソコ	アンソウリソウコ

盆踊音頭

- 一、揃うたくよ踊子が、稻の出穂よりまだ揃ふた
- 二、稻の出穂には出むらがあるが、こよい踊りはむらがない
- 三、今の音頭はどなた様、金の音がする新金の
- 四、踊るすけべが来たわいな、踊り止めまい夜明まで
- 五、お前百までわしや九十九まで、共にしらがの生えるまで
- 六、坂田藤十郎や島崎や、さては山下又四郎や
- 七、さては山下又四郎は、役者真似をば合圖とる
- 八、飛驒の高山一之町、腰を二重に海老坂を
- 九、腰を二重に海老坂を、互に手を取りつゝ上りつゝ
- 一〇、たがひに手を取りつゝ上りつゝ、上りつめたの嬉しさよ
- 一一、嫁入するなら石浦や片野、見てやなぐさむるの山を
- 一二、踊らまいかな十五夜様の、月の山へはづるまで
- 一三、飛驒の土地では一袈裟丸で、二番占めたる三福寺
- 一四、こゝは二之宮せり合音頭、誰にまけずよ勇ましや
- 一五、歌の習か塩屋の作法、歌のしまひに尾がござる
- 一六、さらばくと山口上野、涙こぼすは美女嶺坂



- 一七、江名子山口畑ごこ田ごこ、大根蕪はよく出来る
- 一八、生井うら盆近寒のしみよ、お手がつめごと踊られぬ
- 一九、踊りはねるは今夜ばか、明日はさんざのしほれ草
- 二〇、飛驒で高山越中で富山、人にあはれのないところ

田 植 歌

- 一、おらがおやぢのしんがい田じやで三株一束になるやうに
- 二、おらがこのまのやればんじややらお城太鼓の音のよさよ
- 三、わしもけなるや兄弟連で こうた習ひにかみがたよ
- 四、今日もうれしや日輪様が東山からにこ／＼と
- 五、一夜ばかりか千夜も来るね堅い女や帯どかぬ
- 六、平湯峠が海ならよいねおくとお前と船で越す
- 七、田植なりやこそお前のそばにあひにや見るばか思ふばか
- 八、長い枕じや端切りなさりよ二人寝る夜はござるまい
- 九、ドッコイショとじて寝たる其の夜は極樂
- 二〇、飛驒の高山名は高いと言へど低いお江戸は見えやせぬ

- 二、嫁にやるなら五名の日影石が落ちそであぶないね
- 三、江名子山口畑處田處娘やりたや婿ほしや
- 三、蟬が鳴きます千光寺山下下保桐山よいと鳴く
- 四、よいとは鳴くが何がよかるよ山の中
- 五、しめてなるもな太鼓やつとみ なんぼしめてもわしやならぬ
- 六、まめで務めて八月おいで日々數へて待つわいな

桑 摘 み う た

- 一、高い山から三川見ればお萬かはいや布晒す
- 二、桑をもりやるかおこがひよいが若い糸ひき頼みやるか
- 三、おらも行きたや小八賀町の野中たんぼの桑もりに
- 四、高い山から高い木から落ちよ松がさ身を捨てよ
- 五、霜じやくくと枯木を流す流す枯木に花が咲く
- 六、おらが病は豆腐の病もとの豆にはなられまい
- 七、可愛がられりや命がもろい何かどがしてにくまりよか
- 八、聲のよい衆はしあはせな事や知らん他人にほめられる



- 九、酒はよいもの氣を勇まして顔へ五色の色が出る
- 一〇、木曾では御嶽甲州ではこたけ諏訪ではたてじなやつがたけ
- 一一、木曾へくくと積み出す米はいなやたかどの餘り米
- 一二、可愛がられてまたにくまれりや可愛がられたかひがない
- 一三、きりやうのよい人聲までよいがおらもきりようよて聲よかれ

草刈うた

- 一、草をかりやるかかりぼししやるか鎌がきれぬかおいとしや
- 二、鎌が切れねばとぎてもやるがおらがとぎたと言はれるな
- 三、雨が降るやら夕立来るやら山の木葉のうらがやす
- 四、夏の草刈二だんでよいに 山に長居りなされるな
- 五、むかしや大名今世におちてござさまじりの草を刈る
- 六、ぼんが来たとて嬉しゆもないよ盆にかたびら貰やせず
- 七、盆がはやくる紺屋はやる盆のかたびら白で着る
- 八、新宮祭は九日十日宮の祭は二十五日
- 九、踊らまいかよ二之宮様で四本柱を中にして

- 一〇、馬に乗る者大名といはゞ夏の草刈や皆大名
- 一一、蟬は鳴けども日暮は霧よ螢かあいや夜明まで

白ひきうた

- 一、白の重さにお前を待った 白の軽さの嬉しさよ
- 二、白の軽さはねごりの主さ 相手かはるなあすの夜も
- 三、鳥も通はぬ嶽山なれど 住めば都に思はれる
- 四、鳴くな鶏夜はまだ明けぬ 明けりやお寺の鐘が鳴る
- 五、面白いでの歌ではないよ 仕事辛苦に見られまい
- 六、ごりもごなたもほりこま まいか早やうしまへりや皆がよい
- 七、お寺参れよ若いにやよらん 若うて先立つ身じやわいな
- 八、歌ひなされよ御歌ひなされ 歌で御きりようが下りやせぬ
- 九、聲のおぞいは聞手の損よ 歌ふ其の方面白い
- 一〇、お寺参りより白ひきなさい 二升と三升ひきや五升になる
- 一一、思ひ出すわい日にく増して 親があらばと思ひ出す
- 一二、腹が立つても勘忍なさい 若て智恵なうて歌ふのよ



- 三、そよど吹く風山田の小風 かやすく風にふみをやる
- 四、破れ扇でわしや身捨てられ 風の便りもないわいな
- 五、白は大白ねごりは殿さ 白のまひようはごまのやうな
- 六、歌を聞いてもそうしを見ても さまよう浮き世のことばかり
- 七、さまのご用なら車ごでもしよ 水はなうてもまわりませう
- 八、野でも山でも子は持ちおけよ 千のくらより子は寶
- 九、ござるくくと浮名はたてご ごとへござるよ喃ごのこ
- 一〇、ごこのごばでも ちやうはんばでも さらしごはないこちの人
- 一一、お前を見るやうな ぼたんの花が 咲いてをります道端に
- 一二、白のねごりがねんかごこいた わりと寝すかよ白臭い
- 一三、歌へ歌やれ ねごりの殿ご 歌や押木にのせてやる

手 毬 う た

すくくばうすのかんだんけ となりの爺さん京参り 京のみやげは何んじやつた赤いち  
りめん三尺と白い縮緬三尺と 六尺もらつていやうれし  
隣のご婆々に盗まれてあゝ腹立ちや そんなに腹が立つならば前の川へ身を流せ 身は身

で受取れよ袂の中に子が二人

男の子ならやれ拾や 女の子ならふみつぶせ 女の子じやとてそうするなのませて食はせ  
て休ませてせにの一文使はせよ ますく一貫かせました。

(此の外 いすくのいすこめの、大黒様といふ人は、かんきのうらく、おらが大事な、おらが  
弟の千松は、おらがおもてに米屋がござる等は高山地方と同じであるから畧す)

お 手 玉 う た

- 一、一つべたしよ 一つへ
  - 二、二つべたしよ 二つべく
  - 三、三つべたしよ 三つべくく
  - 四、四つべたしよ 四つべくくく……………(以同下様畧す)
- 二、一れつだんばん はれつして 日露戦争相にくに さつさと逃るはろしやの兵 死ん  
でもつくすは日本の兵 五萬の兵を引きつれて六人残してみな殺し  
七月八日の戦にハルビンまでも攻め入つてクロバトキンの首を取り東郷大將萬々歳

(此の外に二、三あれども高山地方のと同じ)

子 守 歌



一、ぼうや泣くなよねんねしよよ いまごろはどゝさん何所にゐる

海山越して満洲の ぼうやのみやげはロシアの首

二、ねんねんこんこや ねやこや

ひつして寝た子の可愛さよ

起き泣く子のつらにくさ

三、ねん ねん ねやまのりすの子は

鳴きくお里へ夢買ひに 夢買ひに

とんととたゞけぞ よう起きず

お山はねんねした影ばかり 影ばかり

こなばのおうすへこけ落ちて お山は雪だ 夢に見た 夢に見た

四、この山越えて あの山越えて 坊やお守りはどこへく

お目々はさめてもおとなしく よい子よく寝れよく

あの野を越えて此の川越えて坊やお連れは 何處へく

さへづるひばりも聲やめて よい子く寝れく

五、ねんねやこんこや ねいやこや

ねんねのお守りはどこ行つた

山越え川越え里へ行つた 里のみやげはなんじやつた

でんく太鼓に笙の笛 おきやがりこぼしに ふりつゞみ

吹いて たゞいて 聞かせましょねんねやこんこやねいやこや

螢がりうた

一、ほつたるくこつちこい あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ

二、ほつたくこつちこい ちんぼこい ちんぼこい

あさつきこい おさかせる おやんぼこい 山かせる

ほつたこい こつちこい

三、ほうくほたるこい やまんばこい ちんくれる あつちの水苦いぞ

こつちの水甘いぞ ほうくほたるこい

四、さても優さしや螢虫 晝は草葉に身をかくし

夜は野に出て身をこもす

風あげうた

一、風々上れ 天まで上がれ 風よくうけて 繪風に字風



二、

どう神く風よこせ 風をよこさにや山どめる

どちらも負けずに天まで上がれ

山の風も川の風もぶーと吹いて来い

三、

お山のくんの天狗さん

お神酒を一杯あげますに お風をどうくんとおくれんさい

木やりうた

- やつとー 皆様方よー おーいおい
- おいたのみます おいよいしよ
- やつとー 力をそろへて おーいおい
- そりや御一同に おいよいしよ
- やつとー うらづなきんちやく おーいおい
- そりやへそゝらせ おいよいしよ
- やつとー このつぎちやうのじ おーいおい
- そりやながくねしよ おいよいしよ
- やつとー 長くはむりやで おーいおい

○

やつとー みゝすのほねに

そりやきりごりしよ

おいよいしよ

おーいおい

そりやつまつたぞ

おいよいしよ

あーやーれ 今度はながこじや

えんやらしよ やんさあ

えんやらしよ

炭焼うた

- 炭の値段は品質次第 品がよければ 賣れもよい
- 炭の改良は毎俵検査 目方揃へて 一八軒七五
- わたしや飛驒の山奥住ひ炭焼く煙を見て暮す
- 飛驒へ来てから 七年 此方 奥山住ひの炭焼しやうばい

上枝村の民謡

盆踊音頭

一、五ヶ村若衆長い羽織をべたくとべたくと長い羽織をべたくと



- 一、おごらまいか見まいか島の徳べゑの嫁見まいか
- 一、おごらで果てた三十過ぎたら子がおごる
- 一、おんどとりめがとりくたびれて さいた刀を杖につく
- 一、おごりすけべが来たわいな おごりややめまい夜明けまで

田 植 う た

- 一、やればんじややらお城太鼓の音がよさよ、音がよさよ お城太鼓の音がよさよ
- 二、苗がきりかよ此の田がきりか苗がきりならつかみざし(二回返す)
- 三、早乙女ゑるか、ゑんか、ゑんにや、追水あてかけるポチャヤ、エント、ヲツトメジャ
- 四、早乙女婆々でもよいが爺々の早乙女たのみやるな
- 五、立男ウチウチ ぞーじや 鍬に植え付しられんな
- 六、外に苦なことないがしろ(田を植える様準備の出来た田)がねぐさるそれが苦じや
- 七、早乙女婆々早乙女で肥コナシかけでも稲や出来る
- 八、どんごどにいわる事やおらも仲間にしておくれ
- 九、にいわらかいてゑいた田にこそ米がなる
- 二、今宵一夜は御宿りなさりよ西の黒雲雨となる ア、エイテコイ

二、大手にさばけ我れも大名の子じや孫じや

ア、ポチャヤ

桑 摘 み、草 刈 の う た

- 一、奉公せよなら町屋か寺かいやじや田舎ウイゴの草刈は
- 二、昔しや士この世に落ちて小笹交りの草を刈る
- 三、お嶽七尾の裾に麻を蒔いたが生えたやら
- 四、木曾の御嶽夏でも寒むや袷やりたや足袋添へて
- 六、郡上の八幡よい茶の出所娘やりたやお茶摘みに
- 七、御嶽山の峰の白雪朝日でとける娘島田はねりやどける
- 八、おいておくれよはないておくれお伊勢参りの身じやわいな
- 九、お前にや終身ないよ落ちる松葉の露程も
- 二、泣いて見せるに疑ひはらせうそに涙が出るものか

白 挽 う た

- 一、どのさの番じややら城の太鼓の音のよさよ (以上全体を歌ふ都合四人にて掛合に歌ふ)
- 二、歌へよねごり(白の傍にて白を廻すもの)のおやし押木オシキにのせてやる (以上全体を歌ふ都合三人にて掛合にて歌ふ)

(以上全体を歌ふ都合三人にて掛合にて歌ふ)



三、此の白ざんざと出よ、晩のあがりがおそくなるね (以上全体を歌ふ都合三人にて掛合にて歌ふ)

手まりうた

- 一、こんきの浦々お爺やお婆々の お茶碗けつからかいてかおり一つしやくかほり二しやくおつするく 一杯すいましよ 二杯すいましよ 三杯すいましよ 四杯すいましよ 長いおつすり 一杯すいましよ 二杯すいましよ
- 二、天笠やくあつらたあまちや からまちや につしんさいたら大いらみいちまちよたかの巢かけて其の巢を落しに行つたらば雨が降るやら霧が降るやらお身様くちようびやくわたいた
- 三、砂糖くの砂糖やさん おさとは一斤いくらじやね三百三十三匁もちとまからかちやからかほいお前のごとならまけてやる一斤二斤三斤四斤四間町のぞつこいしよ
- 四、おらが弟の千松は長い刀がさしたがる長い刀をさしたけりや向ひ小山のほの木を切つて倒いて枝むいて木挽たのんで挽き割つて大工頼んでかなけすりぬしや頼んでぬりたてゝそれを刀としてさしてさいた刀で腰きつた
- 五、なりてんこりてん中ちよで ちようびやく なりてんこりてん中ちよで 二百……………一貫

- 六、さんごうわたいた にんじゆうわたいた さんじゆわたいた……………
- ちようでちようびやくさんごーわたいた
- 七、いづくのいづかみの番頭さん…………… (高山地方でうたふのに同じ)

子守うた

- 一、ねいやこーや ねんねこや ひつして寝た子のかわいさよ 白いまんまにとゝそへてー赤いまんまに塩かけてねいやーこーや ねんねこや
- 二、ねーやこーや ねんねこや ねんねころりと ねてさいくれりや 守も樂じやが子も樂じや
- 三、ねーや こーや ねんねこや おーらん一郎まの (自分の負んでゐる子の名を言ふ) 守りやごこー行つた、山越し川越し里へ行つた 里の土産は何んじやつたー ねーやーこーやねんねこや

木やりうた

- 一、やつとー 皆さんごうじやー ㊤㊤㊤㊤ ぞりや頼むぞよ ㊤㊤㊤㊤
- 一、おどけは おいてー ㊤㊤㊤㊤ ころりや佛にしよ ㊤㊤㊤㊤



- 一、やつとー かなくりや出来た でヲーイオイ こりや頼むぞよー ヨイシヨー
- 一、横づけ大もちやヤーイトシヨー
- 一、あんころもちや手につく ヨーイトシヨウ
- 一、菓子やの番頭はアーラエトシヨ
- 一、申そかい(ヲーイ) 申すと言ふたつて(オーイ)  
 何もなや(オーイ) 昔語るか 謎かきよか(オーイ)  
 昔々 その昔(オーイ) 山湯さんのお婆さんが(オーイ) ぼじめて東へ下る時  
 (オーイ) 熱田の宮に晝寝して(オーイ) これ程するしい宮はない(オーイ) これ程  
 涼しいこの宮に(オーイ) 誰が熱田と名をつーけーたー  
 ヤットーうらからもとまで(オーイ) コリヤ一様ねなー

其の聲さますなーイーヤラシヨウ

ヤーアーサアーノー イヤラシヨウ ホーホー

童 謡

- 一、鳶 鳶 舞い〜しよ、あさつての市ね赤いじよう〜買つてくれるね舞い〜しよ  
 う〜

- 二、があよ、ちゆうよあつぼくれるねたつてこい〜
- 三、蜜柑喰ひたし錢はなし旦那の錢箱さらへて叱られ旦那叱られ旦那
- 四、正月えーい 盆よりえい 木履の齒のやうな餅食つて頭の毛の様な昆布食つて正月え  
 い盆よりえい
- 五、空見りや虫々 真中見りや綿々下見りや雪よ雪よ(雪の降るをみて)
- 六、七夕の勸進又らい年ござれ〜
- 七、東神〜風いこせ風をいこさにや山どめる
- 八、螢々乳くれる やまんぼこい宿かせる そつちの水苦いぞ こつちの水甘いぞこつち  
 来〜

酒場のうた

- 一、戀しさにはる〜と父を尋ねて高野の山へ 登り行けば向ふから 一人の御出家が珠  
 数つまぐりて それと見るより衣にすがりつき 之れこの御山に今道信が在しまさば  
 教へてたべ 父の名は加藤佐右衛門重氏と 聞いて名乗るにや名乗られず涙ながらに  
 なき〜別れ行く。

お前の姿は優しいかいな小柳どころか大木柳でないかいな。



二、大皿を立ちわりて われたる皿が目にしたば 鍋棚へとかくしおくかくし おいたら お内なる主人に見つけられ 唐津南京河渡焼皿鉢吞果して四十残る お箱のないのが 私のぶちよう方お腹が立ちませうが皆んな因ねん事じやとあきらめ下しやんせ。

三、おらがとなり豆腐やがござりますそこで油揚豆腐さんの言ふ様ねや三千世界をたづねても私程の因果なものはない石川五右衛門さんではなけねども油の釜入までさせこれでかこの上にと乗せられて小さい小店に朝から晩まで晒されて 一錢二錢と買られ行く身が悲しささけぶ所へ どうふやの主人がとんで出で これくそちたち何をなげく上を見るにもきりがなし 下を見るにもきりがなし定めし親があらうがなハイ親は島で豆でござる。

四、川上の宿續き

わたしやあなたに小糸坂元より古い古町の固い約束 石ヶ谷ごの様に水がさゝりやうが清水坂忍びくで新宮村世間の噂はどの様に立岩でも 一日待いよ三日町淵際ありご橋放田ヶ野の池の中でもこちいとやせぬ ア、コリヤくく

五、昔く鶴と龜との夫婦になつた其時の寝物語き、ますれば世間の人の言ふ様にや鶴は千年龜は万年そこで鶴さんの御果になつた其後の九千年をやごめでくらすならわしやつらい。

清見村の民謡 (福寄地方のうた)

盆踊音頭

一、高山踊

揃たくよ踊子が揃た 稻の出穂よりなほ揃た  
今の音頭はごなたやら 鐘の音がするあら鐘の  
聲は細聲身は廣し 聞えますまいますまへ

二、五ヶ村

おいでたかいな おそうはないかよ いつもより  
五ヶ村名主 長い羽織をべたくと

三、ヨイトく

信州信濃の新蕎麥よりも妾や貴方の ヨーホイ ヨイトく 側がよい  
平湯峠が海ならよいねいとし殿まご ヨーホイ 舟で越す ヨイトく  
鳴いてくれるな日暮の鳥心細いよ ヨーホイ 旅の空 ヨイトく

四、くさ

一に一谷敦盛様よ 二には日光の御照覽様よ 三に讃岐の金比羅様よ



四には信濃の善光寺様よ 五つ出雲の色神様よ 六にや六角堂の観音様よ  
七つ七尾の天神様よ 八つ八幡の八幡様よ 九つには熊野の権現様よ  
十にや所の氏神様よ

田植うた

- 一、よう植えん奴じや おれに續いたら 金萬兩
- 二、妻がうたつたら向ひでつけた 昔なじみか友達か
- 三、たい松差上げて見せよ少しやお顔が見とう御座る
- 四、やればのじややら お城太鼓の音のよさよ
- 五、千光寺山下下保桐山よいとなく

桑つみうた

木曾の御嶽夏でも寒い 裕やりたや 足袋添へて  
裕ばかりもやれもすまい 襦袢仕立て、足袋そへて

石場かちうた

- 高い山からアの谷そーおく見ればのー うりや茄子びのイヤの花ざーかりよ

アリモヨイくくく コリモヨイくくく 又ドンくくく

アリヤリヤノコリハイセ サ、ナンデモセー

- 高い山からの谷そく見ればのー

おさん可愛ウの布晒らすヨ (囃は前の通り)  
手まりうた、お手玉うた、子守うた (高山地方と同じ故略す)

木やりうた

- ヤーットトー 大物ういた オーイくく おい引いて呉りよ  
ヤーットトー 元から頼むぞ おい綱の衆

風上げうた

- 風々あがれ 天まで上れ
- 天狗く風いこせ 風をいこさにや 山止める

牧ヶ洞地方のうた

盆踊音頭は殆ど高山地方のと同じ



- ふじせ ふくより 三谷までも 名所名高い牧ヶ洞
- 牧ヶ洞とはだりや名をつけた名所どころとつけなほせ

田植、桑摘みうた

- おじやうひち (娘の意か) 田植の姿さが沼田をこぐやうな
- 苗がきりかよこの田がきりか苗がきりなりつかみざせ
- 桑をもりやるか蠶飼はよいか若い糸引 (又はおじやうひち) たのみやるか頼もおこが村の若い衆の世話にせん
- 桑をもりたや おはちが町の野中 たんばへ桑もりに

手毬 うた

- 向ふの山のめんごりは ちゆうくごりか めんごりで きんざしかんざし もらつてびようぶの影に置いたれば キーく鼠がひいていた 何所から何所までひいていつた鎌倉街道のまん中までひいていつた一の木二の木三の木さくらよよ松 やなぎ柳の下の方さんは蜂にチクリとさゝれてもいたいとも言はずかえいとも言はずたゞなくばかり。

(また此の外にうたふれども高山地方と同じ故略す、お手玉うたも同様)

子守 うた

- てんぢくやくあつたら あまちや からまつや 西がさいたら おほいらみ 西町よたかの巢をかけてその巢をどしに行つたれば雨がふるやら風が吹くやら霧がふるやらおみさまくちようびやくわいた。
- 赤いまんまに塩かけて 白いまんまにとそへて
- ねんねしよく うちの子は出て来た三月さくらの咲く頃にごうりでお顔がさくら色

螢狩 うた

- ほつたりこーい ちくくれる 山伏こーい宿かせる
- あつちの水ざ苦いぞ こつちの水ざ甘いぞ ほつたるこーい ちくくれる

糸挽きうた

- 益田糸挽き 乞食とひとつ 箸にしようけに挽そへて
- 糸を挽くやうなしんくな事をだりがおそへた習はせた

山伏こーい 宿かせる



風上げうた

○ どう神く風いこせ風をいこさにや山とめる  
 ○ お山のく天狗さまお風をどうくおくれんさい風はいこさにや山とめる

白ひきのうた

○ 白をひくにはこうひくものよかけた禱のまわるよに  
 ○ 白のかるさは相手のよさよ相手かはるな明日の夜も  
 ○ この白さんざと出よ早ねよづまが門に立つ

丹生川村の民謡

盆踊音頭

一、聲は細越新張ひろや 聞えますまい 坂卷へ  
 二、恵比須峠に蛇が居るといの でかい蛇じやと 言ふうそじやとい  
 三、田舎なれども折敷地名所 いつも雪駄の音がする  
 四、まてや白じやき小木曾の中根。羽織やすめて行かまいか

田植歌

一、せみガ鳴くく千光寺山で 下保桐山よいとなく  
 二、下保桐山よいと鳴けど 何がよかろか山の中  
 三、おらが殿さの しんがい田じやに 三株一把になるやうに  
 四、植えてくれるな一筋苗をおらに 妻子のないやうな  
 五、朝寝するなよ勿体ないに明けて 下さる朝日様  
 六、殿はとしすみ百姓は 油絞り取られる殿様に

桑摘みうた

一、おらも行ききたや小八賀町の野中たんぼの桑もりに  
 二、桑をもりやれば真桑をもりやれもれどたまらぬあざみ桑  
 三、桑をもりやるかおこがいよいか若い糸挽頼みやるか

白ひきのうた

一、きりくどまふ嫁ほしや白のいわ白嫁に取れ  
 二、今年しや豊年穂に穂がさがる榊をとつておいて箕ではかれ



三、やしみしやんすな枯木じやとても藤がまきつきや花が咲く

手まりうた

一、おらが弟の仙松は背が低ふて いきすぎで長い刀をさしたがる長い刀をさしたけりや  
向い小山の朴の木を伐つて倒して枝もぎて木挽たのんで荒けすり塗師たのんでぬりた  
て、高い所が七ところ低いところも七所高い所から落ちられて竹のとぐしで胸ついで  
死んだらば小すきばんばで墓ついて誰が墓じやと問ふたらば仙松墓じやと言ふておく  
れく。

お手玉うた

(高山地方のと同じ)

子守うた

○ ねんねやこんこや ねんねこや おらがお千代まの守りやどこへ行つた山越し川越し  
里へ行つた里のみやげに何じやつた でんく太鼓に笙の笛たいてならいて嬉ばし  
よ。

螢狩りうた

○ 螢來い山うばこい あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ。

石場かちうた

○ 祝ひませうか祝ひませうか 今日はいい日で天社日で 何村何區何衛門の家を建築地  
がためで金神ふさがり皆あやまりて——區内親族隣家を皆頼み大黒柱でかちはじめ  
戌亥方へどこかち行きて——じりりくどこかちはまりいよくならば皆様頼むぞよ  
く

木やりうた

○ 桐山かんしやく……………そりや出て來たで  
○ 大もちや寝込んだ……………そりやひつたくれ

大名田町の民謡

田植歌

○ 天氣よければ大垣様の時の太鼓の音のよさよ  
音のよいはづよおらが殿子の番じやもの  
腰のいたさよ この田の長さ 田植する日の日の永さ



殿はとうすみ 百姓は油 しばらくとられる殿様に  
此處は道ばた大街道ばた 大株小株のないやうに  
五月一日なく子がはしや畔にたゝせて腰そらす

桑摘み歌

- ヨーラーイヨ かいこよければ 内方までも アーナンジャイノ
- ヨーラーイヨ 飼ふたおやじも しやんとする
- ヨーラーイヨ 馬がよければ 馬方までも アーナンジャイノ
- ヨーラーイヨ つけた荷までも しやんとする
- 桑をもりやるか おこがひよいか内でかゝまがやとやるか

草刈歌

- 馬に六束かち荷に二束おねておいでよそろくくと  
殿の大事な草刈場所に茨さいかちなけにやよい  
手毬うた、オ手玉うた。(高山のま同じ畧す)

子守歌

- ねんねや こんこを のつごいまんまに とゝそへて 赤いまんまにしほかけて  
さらりくくと くわまいか

木やりうた

- おほきな綱手じや ゑんがらしよ  
やんさのゑんがらしよ ヨイソラ ヨイソリヤ

米ひきうた

- ことしはこうでも 又來年は こうでも有るまい のやむすめ  
白ひきうた

- このうすざんざどおりよよ 大びきはこよいばか アラシヨ

石場かちうた

- やつとこせいよいやな ありやりやのこりわいせいさゝやつとこせ



下呂小唄

下呂はヨ 下呂は湯の島夫婦の温泉いっせ

鷺と薬師のヨイヤサ、仲のよさ

下呂のヨ 下呂の娘たちや温泉そだち

宵の口紅やヨイヤサ、だてぢやない

あすはヨ あすは日和か吹雪か雨か

見やれ湯ヶ峰ヨイヤサ、うすぐもり

櫻ヨ 櫻吹雪よ下呂温泉寺

花をこらふかヨイヤサ、婿ごろか

御嶽ヨ 御嶽詣りは下呂から六里

菅の小笠がヨイヤサ、ちりぢりご

秋はヨ 秋は紅葉よ中山七里

五月さつきのヨイヤサ、花ざかり

男ヨ 男ごしよらく温泉の下呂は

十八娘がヨイヤサ、眼でまねく

白いヨ 白い煙か白雲ぢやろか

夜汽車のあとのヨイヤサ、六ツ見橋

千羽ヨ 千羽が瀧は年がら寒い

寒いが下呂にやヨイヤサ、湯はたえぬ

温泉小唄

中山七里の溪間の木立 曝す錦オハラほどのよさ

山水明媚の温泉街だよ 氣候のよいのは此地の特徴だ

下呂はよいとこ月雪花よ 夏はこいかせオハラこつのかせ

公園登れば湯の街一眸よ 眺めもきれいな下呂奥ラインよ

おかへ登れば御嶽一眸 化粧涼しいオハラ白鷺の肌

南は白鷺乃湯北には薬師湯 民衆娛樂の理想の郷だよ

下呂の湯之島忘れてなろか 日本で三つオハラ湯の名所

益田の川には鯉やら鱒やら 山から鑛や出る河から湯が出る

醫者で癒らぬ病があれば 直においでよオハラ下呂湯へ

日本で三つの神靈泉だよ 不思議に癒るが論より證據だ



胸のくもりもいつしか晴れて 逢ふてうれしきオハラ家族風呂  
邪見につくなよ温泉寺の朝鐘 たまさか逢瀬をふびんと思やれ

湯之島音頭

飛驒に名所も 数ある

中に此處は湯の島 湯の名所

名所湯の島 湯のわく

川に 夏は 河鹿の 聲がわく

わくよ河原に湯が

ぶくくどしかも 千歳の昔から

昔からなる 薬師の寺と

鷺が休んだ 松がある

松があるぞへ 夫婦の松が

人もうらやむ 中山に

山に御ン岳雪こそ見やれ

里にや櫻の 花の雲

雲の帯した あの橋けたの

下に椀貸す 淵がある

あるき乍らも 手に手を引いて

六見橋ゆく なかのよさ

夜さの逢ふ瀬に

あの大杉の 梢末まで契りたい

鯛はなくても この川育ち

鯉は登るよ 千羽瀧

瀧に鼓の調べをさせて

峯に琴ひく松の風

松の風さへ いとふたなかに

立てゝおきましよ 屏風岩

岩に紅さす あの山つゝじ

化粧するのも 主のため

主のためなら 中山七里

雪の夜道も 徒歩はだし



はだし詣りは お薬師様に

親を大切の 孝池水

すいた同志が 手鍋をさげて

苦勞少ケ野 わび住居

住居住吉祭りの 宵は

すむよ空にも 秋の月

つきの名残の 涙の雨に

ぬらす袴の 膝のひだ

馬鹿の さんたらり

男は いくた！

女は いくた！

何そっしん なんだい

いっしん なんだい

別冊 別冊 別冊 別冊 別冊 別冊 別冊 別冊 別冊 別冊

昭和八年七月一日印刷  
昭和八年七月三日發行  
〔非賣品〕

編輯兼 發行者 高山西小學校研究部

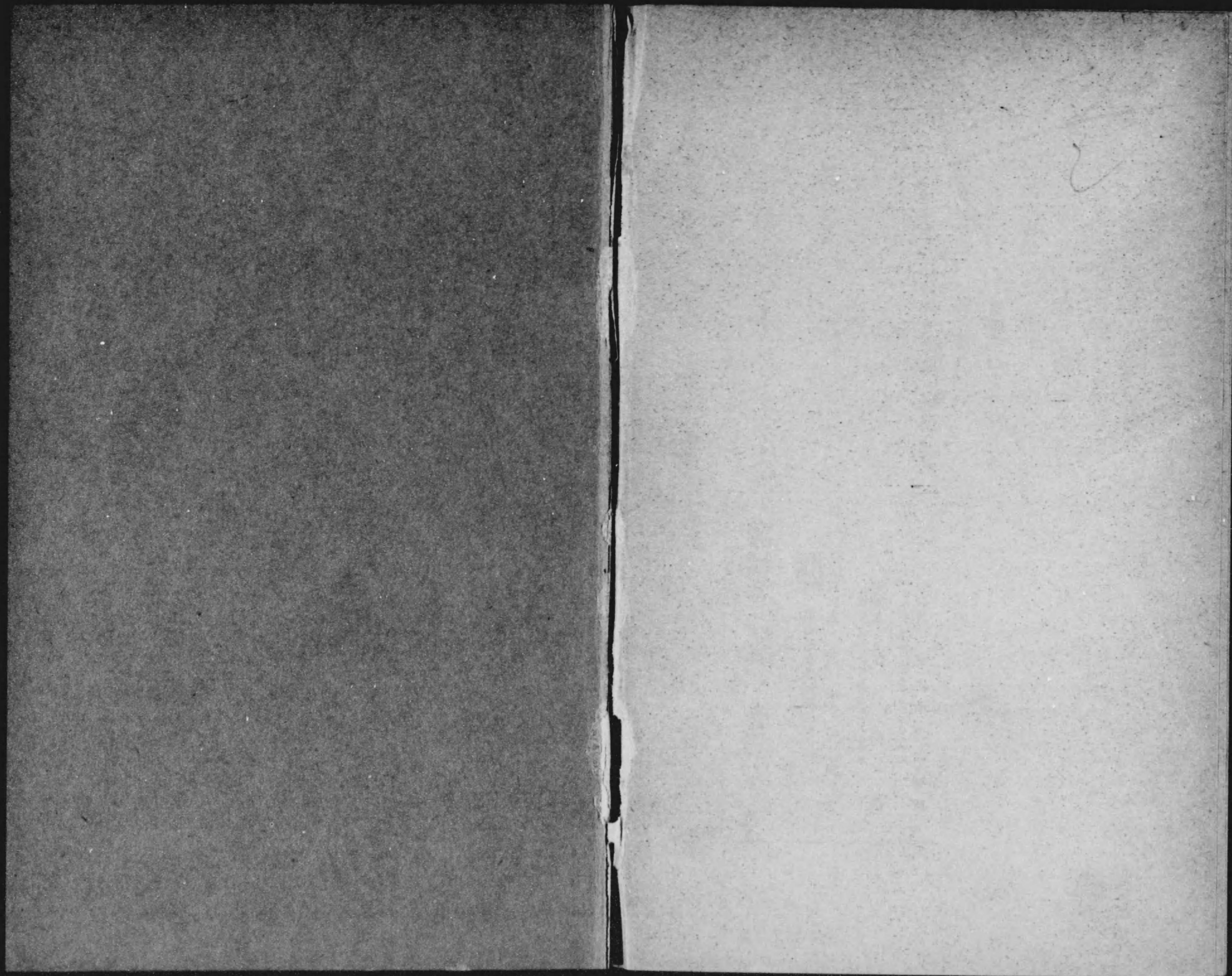
代表者 高木清太夫

印刷人 住廣造

印刷所 斐太中央印刷所

岐阜縣大野郡高山町大字三町九七九番地







639

139



